

大磯町の横穴墓群

—— 詳細分布調査の成果と課題 ——

鈴木 一 男・國 見 徹

はじめに

大磯丘陵に横穴墓群が集中しているのは、既に周知の事実であり、特に大磯町においては、遺跡の約半数が横穴墓群で占められていることは、まさにこれを裏付けているものと理解できる。

横穴墓の造営場所は、一般的に谷の斜面にみられるが、容易に肉眼で確認できるため、古くから研究者にとって関心のおよぶところとなった。すなわち、1886年（明治19）細木松之助が東京人類学会雑誌に「高麗山ノ西二続ケル小丘ノ南腹ニ横穴数個アルヲ」と紹介したのを皮切りに（細木1986）、翌年には山崎直方、若林勝邦らが同誌に大磯町の横穴墓群を紹介していることから充分窺い知ることができる（山崎1887・若林1887）。また、相前後して横穴＝住居説と墳墓説の学問的論争の出発点ともなった『吉見百穴』の調査も行われ、研究者と言うよりもむしろ学会としての関心が横穴墓に向けられていたこともその背景にあったようである。それ以後、大正～昭和にかけて石野 瑛・赤星直忠らにより調査・研究が行われ⁽¹⁾、横穴墓群の編年の基礎として用いられ、広く一般にも知られるようになったわけである。

その一方では、古来より墓盗人のターゲットにもなっていたようであり、大半の横穴墓がその被害に遭遇していると言っても過言でないほど、内部が攪乱されている事例がみられるが、これは既開口墓の多さが如実に物語っている。この原因は、前述した立地にあるが、自然環境の中の人為的工作物という観点から考えると、風水害を初めとする自然界の影響を真面に受け、埋没あるいは消滅、場合によればそれが原因で発見といった幾つかのパターンが想像される。いずれにしても大多数の横穴墓はおよそ1300年経過してもそれを維持していることは、驚異としか言いようがないわけである。

大磯町では、平成2年～5年にかけて立正大学にお願いし、横穴墓群の実態調査を実施した。これは当初、横穴墓群の位置や規模を把握するとともに、その成果を遺跡地図や台帳に反映させることを目的にしたものであったが、結果的に個々の横穴墓の略測にまで発展し、予想外の成果を納めるに至った。その一部は、大磯町郷土資料館資料5「大磯町の横穴墓群」として公表されているが、内容は当初目的の結果だけであり、分析結果を掲載しているものではない。そこで、貴重な紙面をお借りして、全貌をここに公表することにしたわけである。

調査の概要

実施した調査は、測量及び記録用器材を携行し、現地到着後、各班に別れ、個々の横穴墓の略測と横穴墓群内における位置関係の把握と言った極く単純なものであった。しかし、遺跡地図にプロットされている場所に無かったり、基数が合わなかったり、調査開始以前に大きな壁が立ちはだかっていたわけである。そして、いよいよ横穴墓の内部調査に移行する段になると、流入土が多く内部に侵入できなかったり、崩壊寸前で非常に危険であったり、はたまた断崖絶壁で辿り着けなかったり、まさに苦難の連続であった。以下に年度別に概要を記すことにする。

[平成2年度]

調査対象：大磯地区に分布する横穴墓群 調査期間：平成3年2月12日～同年2月18日
調査人数：のべ84人 調査成果：28群245基

[平成3年度]

調査対象：国府地区に分布する横穴墓群 調査期間：平成4年2月17日～同年2月29日
調査人数：のべ87人 調査成果：18群135基

[平成4年度]

調査対象：別荘地内に分布する横穴墓群 調査期間：平成5年2月15日～同年2月27日
調査人数：のべ80人 調査成果：2群14基（発掘調査3基あり）

[平成5年度]

調査対象：所在不明確な横穴墓群 調査期間：平成6年2月21日～同年2月27日
調査人数：のべ85人 調査成果：16群83基

このように4年、のべ336人に及ぶ人員を使つての調査の結果、64群477基の横穴墓を確認することができた⁽²⁾。遺跡台帳では77群537基存在することになっているが、既に消滅してしまったものが8群48基あるので、実数は69群489基となる。そして、調査の結果横穴墓ではないものが2群2基存在したので、机上での実数は、67群487基となる。また、踏査の結果ついに確認できなかったものが3群15基存在する。これらは周辺の環境を考慮すると、埋没と言うよりはむしろ消滅した可能性が高い。

ちなみに、昭和39年、池田彦三郎・鈴木 昇らが調査した時点では71群488基⁽³⁾、また昭和53年台帳整備事業として調査した時点では64群411基といった数値が残っている。横穴墓の性格上、造営当初の基数が不明であるため、数値が変化するのは否めないが、今回の調査結果をひとつの指針として活かしていきたいと考えている。具体的には、個々の横穴墓のデーターや横穴墓群の概要は、写真や図とともに、それぞれ年度別にホルダーに整理されているので、今後は3～5年の間隔で追跡調査を実施し、実態の把握に努めていきたいと考えている。

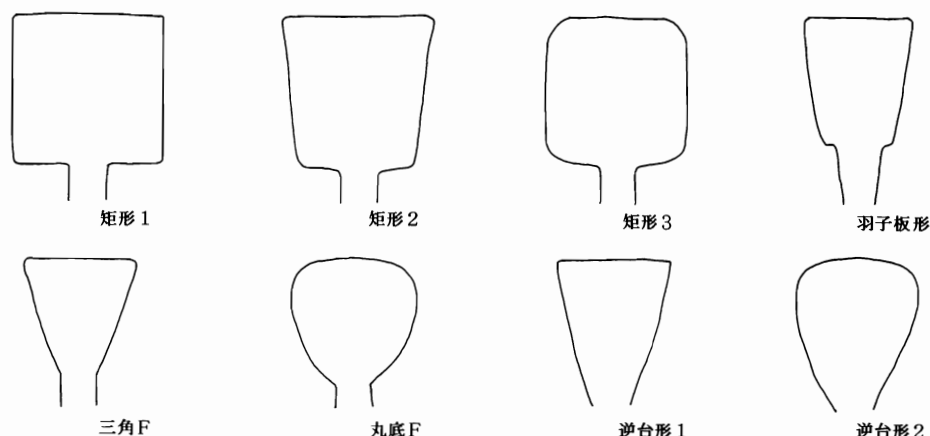
分析の方法と課題

詳細分布調査及び略測という性格上、そこから得られた成果には自ずと限界があることは否めないが、とりあえず開口方向は勿論、基本的事項として天井形態、平面形態、内部施設、壁面装飾の5項目を設定し、個々の横穴墓のデーターを当て嵌める方式をとった。

結果を述べる前に、その前提と分析上の問題点等を列挙しておく。

まず、天井形態は古くから指摘されている、ドーム・アーチ・家形を設定した。実際には、前二者にはその中間形態が存在し、判断しかねる場合も多々あった。

次に、平面形態では第1図のような模式図にしたがって分類した。基本的には、矩形1は正方形ないし長方形平面、矩形2は前者がやや崩れ、矩形3は所謂隅丸方形プランを呈するもので、いずれも前壁を有し、玄室と羨道は整然と区別される。また、逆台形1と2は、玄室と羨道の区別が無いもので、1が直線的であるのに対して、2はコーナーが丸みを帯びているものである。これに対して三角フラスコ（三角F）及び丸底フラスコ（丸底F）は、同じような形態でありながら、玄室と羨道との区別がくびれにより認められるものであり、さらに羽子板形は、矩形2と三角フラスコの中間の形態である。しかるに、実際にはかなりの混乱を招く結果となってしまった。たとえば、三角フラスコと逆台形1、または丸底フラスコと逆台形2などは、図によっては判断しにくい面もあり、ちょっとした線の引き方で異なったタイプに分類されてしまうわけで、多分に主観が入り込むという欠点を有している。さらには同じタイプ内での相違等、判断基準が曖昧になり、ややもすると無理やり当て嵌めざるを得ない場合も正直多々あった。この原因は、流入土の多少にもあるが、測点の位置による形の変化もそのひとつではないかと考えられる。



第1図 平面形態模式図

特に前者は、内部施設にも影響を及ぼしている。すなわち、排水溝と礫敷の数値の低さである。この二つの項目は、発掘調査により初めて正確な数値が得られるもので、分布調査では、当然全くと言って良いほど信用できない数値となっている。

壁面装飾では、天井部を蛇腹状に仕上げる肋骨仕上げと時期は不明ながら古くから指摘されている線刻の2項目の他に、漆喰という項目を設定した。しかしながら、未だ鑑定結果を得られていないため、白色顔料と理解して設定していることを予めお断りしておきたい。

そして、なにより一番気にかかっていることは、天井・平面両形態において、各々約1/3程度が不明となっている点である。これらがどのように分類されるのかによって、後述する分析結果もかなり左右され、大幅な修正が必要になるものと予想されるのである。

分析結果

大磯町における横穴墓群の分布は第2図のとおりで、およそ6つのグループに分けることが可能である。中でも大磯駅北方に位置する楊谷寺谷戸横穴墓群を中心としたⅡグループと西方寄りに位置する、たれこ谷戸西横穴墓群を中心としたⅥグループは群数及び基数とも他のグループを圧倒しており、さしずめ東西を代表する墓場の谷を形成している。

(1) 総体的な特徴

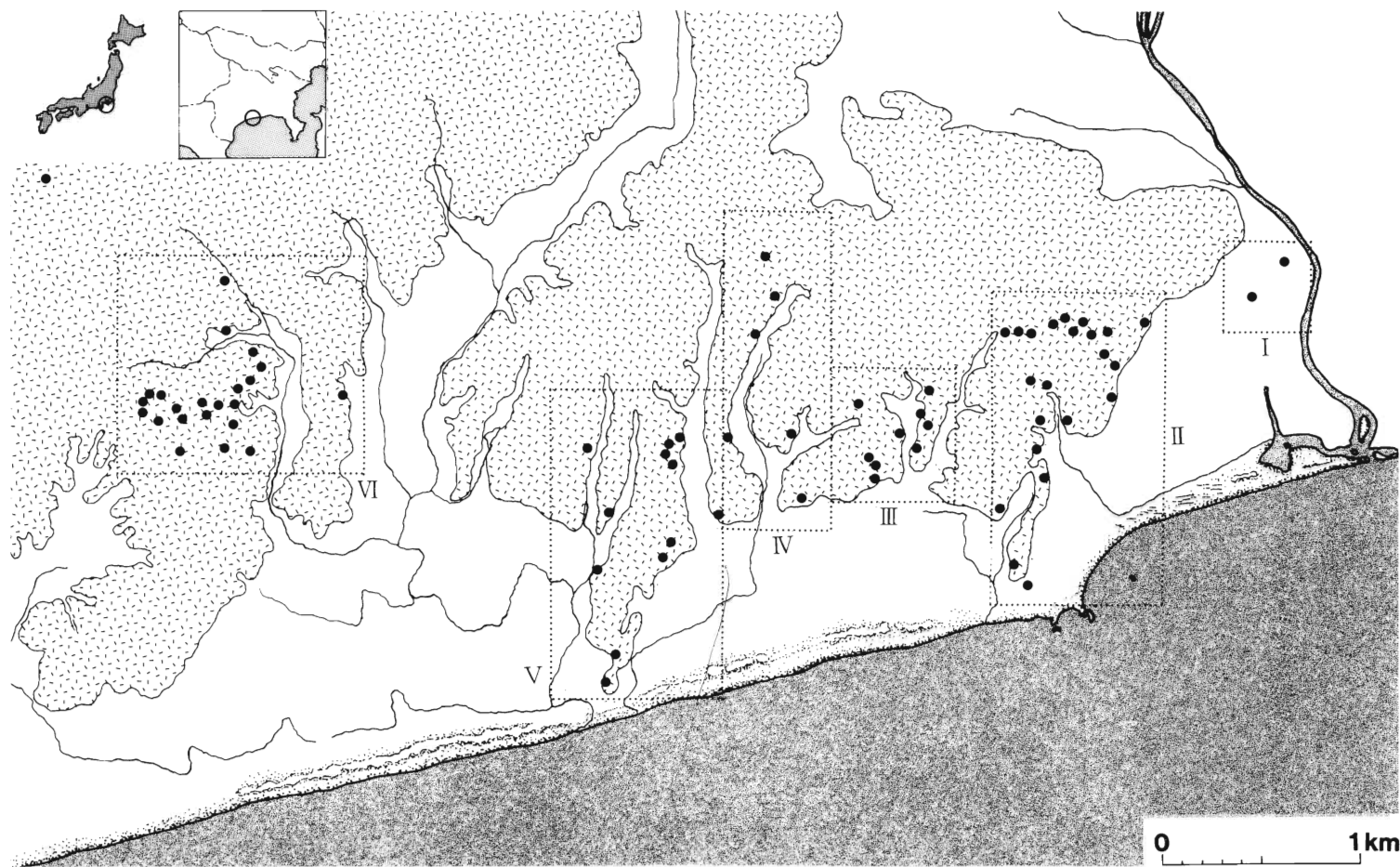
個々の横穴墓群の開口方向は64群中、南方向のものが19群と最も多く約1/3を占め、これに南東及び南西方向のものを加算すると、半数以上の横穴墓群が該当する結果となった。ちなみに、南方向の19群及び東～西、南東～西、南東～南西にかけて開口する5群を除き、東～南に開口するものは21群、南～西に開口するものは19群あり、いずれかに偏る傾向は読み取れなかった。

天井形態では総基数477基のうち、形態を窺い知ることができた343基を対象とした。その結果、ドーム形を呈するものは83基、アーチ形253基、家形8基という数値を得た。これは各々、24%、74%、8%という比率になり、圧倒的にアーチ形天井が多いと結論付けよう。

次に平面形態は、把握できた344基を対象としたが、半数以上の180基が所謂玄室と羨道の区別の無い逆台形1を呈し、逆台形2の数値を加算すると、実に全体の約63%の217基に達した。また、区別の明確な矩形1～3は49基で、全体の約14%、ある程度区別が認められるフラスコ類及び羽子板形は66基で、全体の約19%という数値を得た。

天井形態と平面形態の組み合わせは、明らかに読み取れる48群298基を対象に行った結果、第3表に示したとおり、逆台形1＋アーチ形が約半数を占めることがわかった。両形態分類の結果がそのまま反映したものと言えよう。

また、玄室と羨道の区別の無い逆台形2においては、若干ドーム形が見られるものの、



第2図 横穴墓群分布図 1/35,000 (明治15年測量地形図をもとに作成)

第1表 大磯町における横穴墓群一覧表(1)

No.	名 称	基数	開口方向	天 井 形 態				平 面 形 態										内 部 施 設				壁面装飾				
				ドーム	アーチ	家形	不明	矩形1	矩形2	矩形3	逆台形1	逆台形2	三角F	丸底F	羽子板	不整形	不明	排水溝	棺座	石棺	礎敷	竈	漆喰	線刻	肋骨仕上	
1	善 福 寺	13	南～南西	3	4		6					3	1		4		2	3								
2	高 麗	0																								
3	滝 之 沢	8	東	6	1		1		1	3	1			2	1		1	1	2							
4	前 谷 原	3	南西～西	1			2											3								
5	火葬場	3	南				3											3								
6	後谷原	8	南西～西	2	2		4			1				2	1		4		1							
7	後谷原	4	西		2		2				2						2									
8	南井戸窪	6	東	1	1	4		2	2	1	1							2								
9	石切場	6	南西	1	4		1				4				1		1				1					
10	石 切 場	11	南東		7	1	3	1			5		1		1		3				1		4			
11	楊谷寺	1	南				1										1									
12	楊谷寺谷戸	21	南～南西	1	14	2	4		2	2	3	2		2	4		6									
13	楊谷寺西	11	南東		9		2				8	1					2									
14	紅 葉 山	6	東				6										6									
15	宝 珠 山	3	南				3										3									
16	漆ヶ窪	—																								
17	坂田山	8	東～南東		3		5			1	2						5									
18	坂田山	6	南西				6				1						5									
19	坂田山付	9	南	1	4		4		2		2			1			4									
20	王 城 山	14	西	9	3		2		1	8	2						3		2	1						
21	釜 口 下	1	南				1										1									
22	大磯駅東	0																								
23	駅 前	0																								
24	招 仙 閣	—																								
25	愛 宕 山	7	南東～南西	3	1		3			2	2	1		1			1									
26	愛宕山下	1	南		1						1															
27	南 中 尾	—																								
28	北中尾(1)	0																								
29	北中尾(2)	5	西		1		4				1						4									
30	善兵衛池	3	南	2	1						2				1						2					
31	清 水 北	15	南	2	8	2	3			2	7		1		1		4		1	1	2			1		
32	清水南(2)	0																								
33	清水南(1)	0																								
34	立 野	9	南～南西	1	5		3		1		2	2	1		1		2							1	1	1
35	代 官 山	0																								
36	穴 虫	3	南	2	1							1				1	1									
37	谷 戸 口	3	南～西		3						1	2														
38	谷 戸	4	東				4										4									
39	高平穴口	6	東～南東	1	4		1					4					2		1							
40	高 平	5	東		1		4				1						4							1		
41	本 郷 山	23	東～南	7	11		5			1	13	2	1	1	1		4			1						
42	金久保北	7	東～南	1	3		3				4						3									
43	金久保南	18	南～西		13		5				11						7								1	
44	真業寺南	4	南東		4						4										1					
45	真業寺下	2	東	1	1						2															
46	辻 端 東	5	南	2	1		2			1	1	1					2									
47	辻 端	22	南東～南	4	12		6		2		8	5		1			6			2	1	1				3
48	城 山	20	東～西	4	10		6			4	8		2	1		2	3	1	4							
49	切 通	7	南	1	3		3				2					2	3									
50	堂 後 下	13	南東	5	7		1			3	3	1	1	2		2	1				2			4		
51	庄ヶ久保	8	東		8						4	1	3									1		1	1	
52	下 田	18	南	3	15						4	2	6	4		1	1					1		3		

第2表 大磯町における横穴墓群一覧表(2)

No	名 称	基 数	開口方向	天 井 形 態				平 面 形 態										内 部 施 設				壁 面 装 飾			
				ドーム	アーチ	家形	不明	矩形1	矩形2	矩形3	逆台形1	逆台形2	三角F	丸底F	羽子板	不整形	不明	排水溝	棺座	石棺	礎敷	竈	漆喰	線刻	肋骨仕上
53	たれこ谷戸西	28	東～南	6	17		5				17	2	1			1	7					1	4		1
54	ごみ焼き場	2	南東		2						1	1											1		1
55	ぼったり	0																							
56	権現入田	8	南東～西	3	4		1		1	2	1			3			1						1		1
57	がまん谷戸東	9	東～西		3		6		1	2							6								2
58	がまん谷戸西	6	東～南	2	4						3	2	1								1			1	4
59	権現山東	1	南西		1						1														1
60	権現山	1	南西		1										1							1	1		
61	東奥沢	15	南東～南西	15							13		1				1		2		1		1	1	3
62	大谷入	5	南	2	3				1	1	1	2													2
63	西奥沢Ⅰ	5	南		3		2				3		1				1								2
64	西奥沢Ⅱ	4	南西		3		1				2		1				1								1
65	西奥沢Ⅲ	4	南		4						4														
66	西奥沢Ⅳ	2	南西		2						2														
67	西奥沢Ⅴ	7	南西		7						4		3												4
68	西奥沢Ⅵ	0																							
69	たれこ谷戸東	15	南	2	13				2	7	3	2				1							2	1	1
70	黒岩	0																							
71	出岩	1	南東				1										1								
72	前谷原北	4	西	1	1		2		1		1						2								
73	城山西	2	南西		1		1				2														
113	西奥沢Ⅶ	1	南		1						1												1		1
130	榎久保	1	南東				1										1								
163	出岩向	5	南				5										5								
166	権現田	1	南		1									1											
合 計		477		81	253	9	134	3	11	35	180	37	28	25	13	12	134	2	15	6	12	4	18	12	31

主流はやはりアーチ形である。

しかし、同じような形態の丸底フラスコでは、逆にドーム形が主流を成しており、相違が見られる。一方平面形態が直線的な構造を示す、三角フラスコや羽子板形ではアーチ形が主流を占めている傾向が読み取れ、ある程度平面形で天井形態が左右されるようである。

矩形の場合は、ドーム・アーチの他、家形を呈するものが見られるが、数は少なく、やはりドーム形が主流を成すようである。

内部施設のうち、排水溝と礎敷については先に述べたとおり調査の性格上、信頼できる数値にはならないので、省略するが、特に礎敷は当地域周辺では普遍的に存在するものであり、その数は相当数にのぼるものと考えられる。また、石棺及び棺座の付設は約6%と非常に低い割合となっている。この場合の石棺とは、奥壁沿いに岩盤

第3表 類型別基数

組 み 合 わ せ	基 数
矩 形+ドーム	31
矩 形+アーチ	10
矩 形+家 形	9
逆台形1+ドーム	13
逆台形1+アーチ	143
逆台形2+ドーム	9
逆台形2+アーチ	24
三 角 F+ドーム	1
三 角 F+アーチ	24
丸 底 F+ドーム	17
丸 底 F+アーチ	5
羽 子 板+ドーム	3
羽 子 板+アーチ	9

を刳り貫くように造られた所謂造付石棺である。本町では発掘調査により北中尾横穴墓群において、組み合わせ式石棺が検出されているが、その存在は非常に稀である。一方、棺座も低棺座と呼ばれるもので、他地域でみられる高棺座は現在までのところ知られていない。

なお、龕については西部地域の横穴墓群に若干みられる程度であり、その割合は非常に少ないものとなっている。

次に壁面装飾であるが、まず、漆喰（白色顔料）と考えられるものは全部で9横穴墓群18基で確認されている。その割合は低いと言わざるを得ないが、1横穴墓群中に1基という例と2～4基と比較的まとまって存在する例の二者がある。特に後者の場合は、慣習または伝統とも言うべきものが背景にあったのではないかと想像される。なお、天井を肋骨状に仕上げる技術については、西部地域のVIグループに顕著にみられ、総数31基中、約8割に当たる25基がここに集中している。

これに対して、線刻は堂後下横穴墓群の4基を除けば、1横穴墓群中1基が原則のような在り方を示している。もっとも線刻の存在を確認した12基の横穴墓は、すべて開口していたため、線刻自体が造営当初もしくは追葬段階、あるいは後世のものか俄に断定しがたい点があり、早急には結論付けられないことは確かである。たとえば、平塚市宮ノ入では11基中4基、二宮町大日ヶ窪では33基中2基確認されているし、方や二宮町諏訪脇では東部分で17基中1基、西部分で16基中1基確認されており、近隣でも数値が様々であることから窺える。

（2）各グループ別特徴

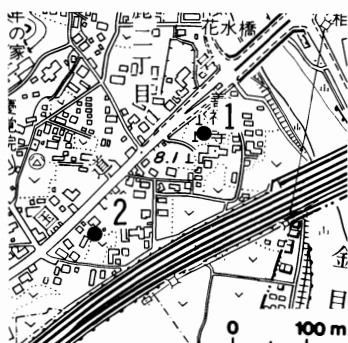
Iグループ

大磯町の東部に位置し、2群13基で構成されているが、1群は既に消滅している。記録によれば、10基近く存在したらしい。また、両者の立地は、古地図によると海岸に突き出すような低い独立丘陵上に比較的接近して造営されていたようである。

現存する1群、すなわち善福寺横穴墓群は、江戸末期に編纂された風土記にも登場し、⁽⁴⁾ だいぶ崩壊が進んでいるが、内部には宝永～文政の銘を有する石造像が存在する。立地の

面から比較的東海道と極めて近い位置に存在するため
の結果と考えられる。

勿論、この1群だけで、本グループの様相を明確にすることはできないが（不明が6基あることも含む）、天井形態ではドーム形とアーチ形はほぼ同じであるものの、平面形態では矩形は全く見られず、逆台形1と丸底Fの数値が際立つ結果となっている。したがって、掘削技術面では、逆台形1＋アーチ形と丸底F＋ドーム形の2形態が特に目立つ。

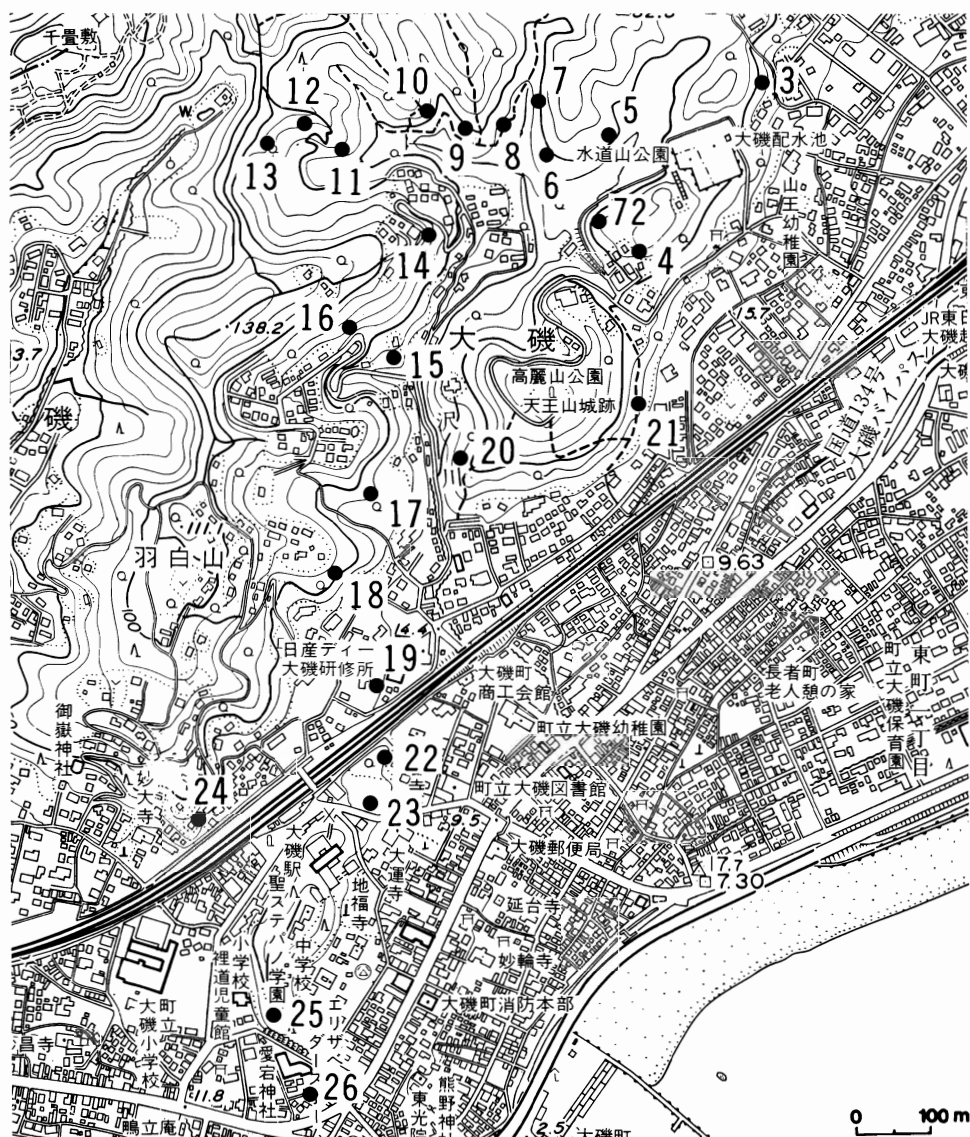


第3図 Iグループ全体図

II グループ

JR 大磯駅の北方、ちょうど I グループの西側に位置し、25群141基で構成されている。やや範囲が広いが、大きく4つに分けられる。すなわち、A谷奥(4~16・72), B谷の出入口(17~20), C谷の反対東側斜面(3・21), D南に延びる支尾根の基部~先端(22~26)である。

本グループの特徴としては、天井形態においてドーム形が目立つ点である。ドーム形とアーチ形の比率は全体としては1:3であるに対し、ここでは1:2である。また、家形が他のグループに比べ多く存在する点も見逃せない。平面形態では、全体的に最も多い逆台



第4図 IIグループ全体図

形1の数値が目立つが、矩形の類いも同じような数値が見られ、他とは異質な印象を受ける。また、かつて楊谷寺谷戸横穴墓群の説明に用いられたように、全類型が見られるのも特徴である。

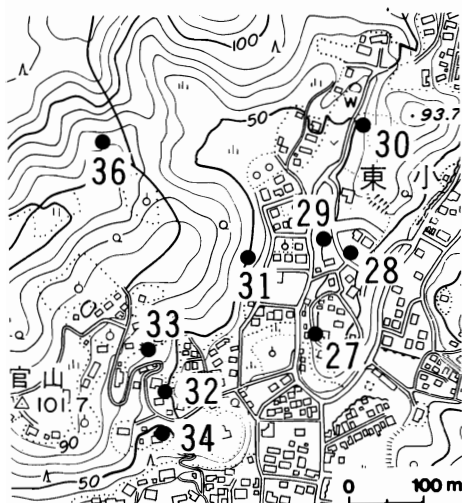
天井形態と平面形態の組み合わせは、明確に判明する13群77基を対象とした場合、やはり逆台形1＋アーチ形が最も多く見られるものの、前記した事実を反映するように矩形＋ドーム形も多く見られ、しかも矩形平面のものが逆台形平面とほぼ同数見られる点も注意を要する(第5表)。

棺座は4横穴墓群7基で、大磯町全体の約半数がここに集中する。石棺についても、全体的に付設割合がもともと少ないが、1/3が本グループに存在する。

次に個々のブロックを見てみよう。まずAにおいては、断然アーチ形が優位を占めているが、家形(南井戸窪・石切場・楊谷寺谷戸に計7基)が存在する点で極めて特徴的である。この家形は、僅かに隣接するⅢグループに2基(清水北)存在するだけであり、比較的集中するような在り方を示している。平面形態では、全体的に数少ない羽子板形がやや多く見られる点に特徴がある。

一方、Bでは王城山のようにドーム形(14基中9基)が主流をなしており、したがって、平面形態でも比例するように矩形が多く見られる。この傾向はC・Dでも同様である。特にCの滝之沢では、8基中6基がそうであるし、Dでは発掘調査された愛宕山下横穴墓群でも、アーチ形3基に対しドーム形7基という結果が得られており、それを裏付けけている。

このように、本グループは谷奥部分では逆台形＋アーチ形と矩形＋ドーム形を双壁に、家形が混在し、出入口及び反対斜面、支尾根では矩形＋ドーム形が主体的に存在する傾向を示しているわけである。



第5図 Ⅲグループ全体図

Ⅲグループ

大磯駅の北西、Ⅱグループの西側に、9群35基で構成される。消滅してしまったものも多く、本来は50基をはるかに越える規模であると想像される。特に、平成元年～3年にかけて断続的に発掘調査された北中尾横穴墓群では16基の横穴墓が検出されていることから窺えよう。

本グループの様相は、天井形態においては、Ⅱグループとほぼ同じである。すなわちドーム形とアーチ形の比率がおおよそ1:2という点である。しかし、平面形態では矩形が少なく、逆台形が主流をなしており、この点ではⅡグループとは明らかに異なる。それでも、清水北のよ

うに家形及び複室の存在、棺座や石棺の付設などある程度つながりをもつ横穴墓群も存在する。また、同横穴墓群には、Ⅱグループ内に位置する釜口古墳の羨門と同じ造りをするものも存在し、極めて密接な関係にあったことが想像される。

天井・平面両形態の組み合わせでは、判別可能な19基中、逆台形1 + アーチ形が最も多いが、これはいずれのグループにも見られる現象であると同時に発掘調査された北中尾(1)・(2)横穴墓群でも実証されている。

ところで、立野では1基だけであるが、天井部を肋骨状に仕上げている横穴墓がある。この技術は、本町では西部地区のⅥグループに特徴的に見られるものであり、異質と言わざるを得ない。また、線刻や前に触れておいた北中尾における組合せ式石棺例も同様である。

このように本グループは、隣接するⅡグループと深い関連を有する反面、部分的に異った技術を取り入れていることが看取されるのである。

Ⅳグループ

大磯町のほぼ中央、ⅢとⅤグループの中間に位置し、6群19基で構成される。規模的には小さく、いずれかのグループに吸収して取り扱うべきかも知れないが、水系・尾根とも異なるので、個別に扱うことにした。また、明治期はもとより、石野・赤星時代にもほとんど触れられる事なく、現在に及んでいるグループで、自然崩壊あるいは埋没の目立つ横穴墓群も多く見られる。

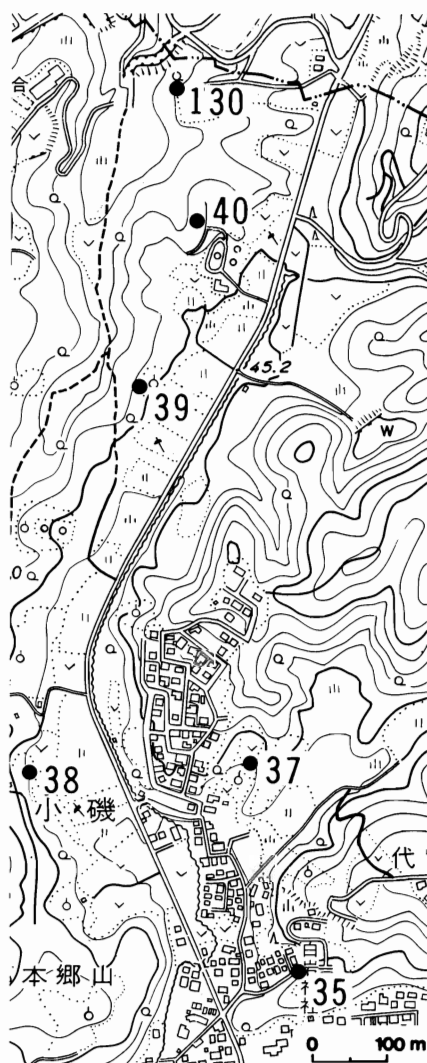
天井形態では、圧倒的にアーチ形が多く、ドーム形は僅かに1基だけである。平面形態では、矩形が全く見られず、逆台形のみで構成されている点が特徴としてあげられる。中でも逆台形1よりも2が多く見られる点は、他のグループには見られないものである。

両形態の組み合わせは、やはり逆台形1及び2 + アーチ形だけである。もっとも明確に把握できるものが僅かに6基と少なく、しかも形態不明のものが全体の半数以上あるので、この結果をもって本グループの特徴と断定することはできないかも知れない。

なお、棺座及び線刻が1例ずつ見られる。

Ⅴグループ

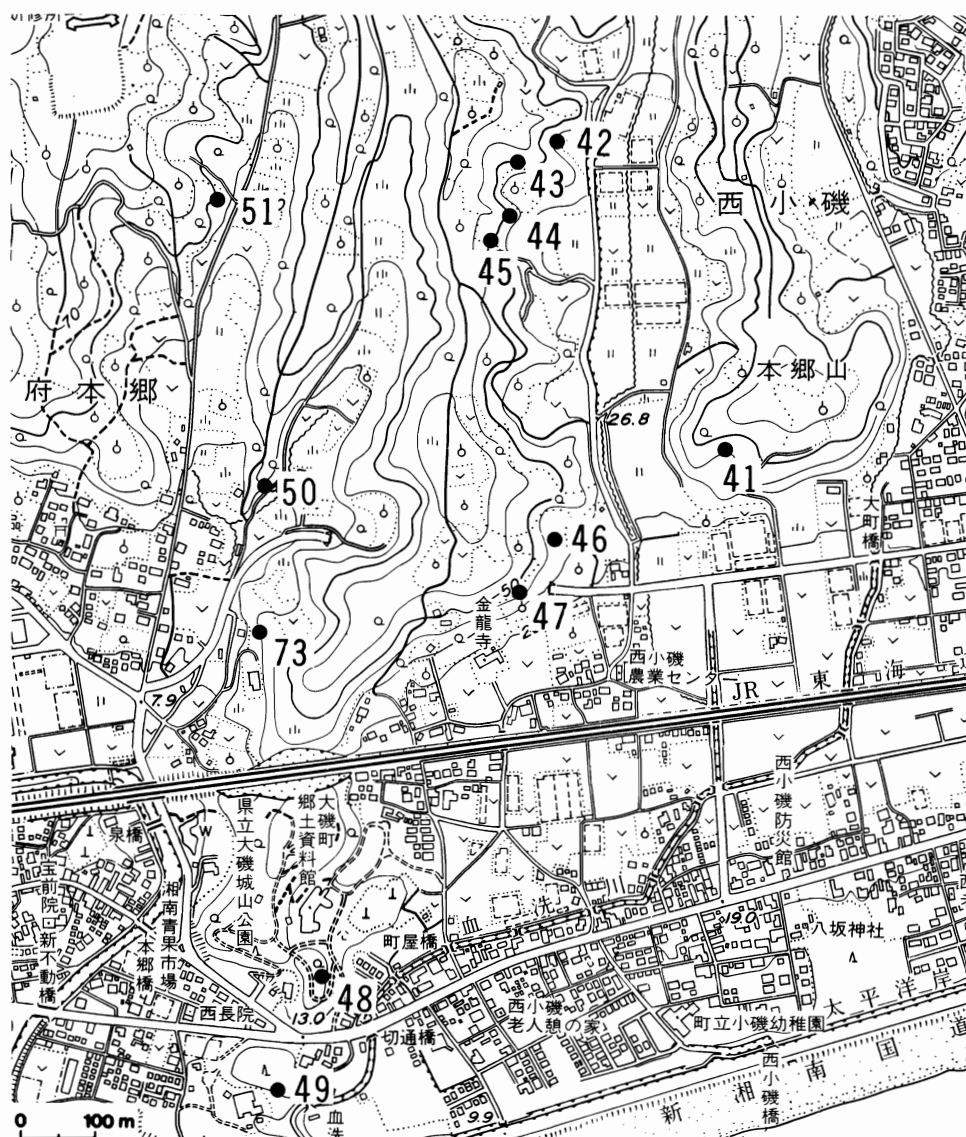
Ⅳグループの西側に位置し、12群131基で構成



第6図 Ⅳグループ全体図

されている。後述するVIグループとは直線にして1km以上離れており、その間は空白地帯となっている。また他と比較して、少ない群の割に、基数が多い点を特徴としている。それは、本郷山や辻端、城山などいずれも20基を越す横穴墓群が存在するためである。さらに、庄ヶ久保や堂後下など学史的にも貴重な横穴墓群も含まれている。

全体的にみると、まず天井形態ではドーム形とアーチ形の比率は約1:3であり、これは総体的比率とほぼ同じである。平面形態では、矩形1を除く全類型が存在し、矩形と逆台形1の在り方は1:6とかなり懸け離れた数値を示している。



第7図 Vグループ全体図

両形態の組み合わせのうち、最も優位なのは、ここでも逆台形Ⅰ＋アーチ形であり、対象基数（10群87基）の半数以上を占めている。矩形＋ドーム形や矩形＋アーチ形もⅡグループに次いで多く、類型として乏しい三角F＋アーチ形もやや多く存在する。

本グループもⅡグループ同様に南北に細長く、範囲が広いが、大凡4つに分けることができる。すなわち、A谷奥（42～45）、B谷出入口（41・46・47）、C尾根先端部（48・49）、D西側部分（50・51・73）である。

Aでは、逆台形Ⅰ＋アーチ形が主体を成し、棺座や石棺の付設は全く見られず、僅かに天井部を肋骨状に仕上げている横穴墓が1基存在する。Bでは、逆台形Ⅰ＋アーチ形に矩形＋ドーム形が入り込み、石棺の付設が見られ、肋骨状に仕上された横穴墓も3基と増加する傾向を示す。Cでは、Bとほぼ同様なことが言えるが、石棺は見られず、また肋骨状仕上げも存在しない。Dでは、堂後下においてのみ矩形＋ドームが目立つほかは、逆台形Ⅰ＋アーチ形が主流を成す。また、線刻や肋骨状仕上げも見られる。

このように本グループ内では、その特徴として、谷奥では逆台形Ⅰ＋アーチ形が主流を成すが、出入口等では矩形＋ドーム形もある程度存在すること、棺座や石棺は谷奥には見られず、むしろ出入口や尾根先端に散見できること、Ⅰ～Ⅳグループでは稀な肋骨状仕上げが幾分存在すること、線刻がやや多く見られることなどがあげられる。

また、全グループを通じて付設の割合が少ない龕が2基存在する点も注意を要する。

Ⅵグループ

大磯町の西部に位置し、23群138基で構成されている。本グループは、56と58を結ぶ線で大きく二分される。すなわち、県指定史跡であるたれこ谷戸横穴墓群を中心とする東側（52～54・69・163）と奥沢横穴墓群を中心とする西側（56～68・113）である。また、北側に位置する71、東側にやや離れて存在する166もある。なお、最北の55は踏査の結果、横穴墓ではないことが確認されている。

まず、全体的な特徴であるが、天井形態においては、ドーム形とアーチ形の比率が1:5となっている点に留意すると、Ⅱ・Ⅲグループではその比率が1:2、Ⅴでは1:3となっており、西に向かうほどドーム形が少なくなる傾向が読み取れる。事実、先に分けた東側ではドーム形が11基存在するのに対し、西側では7基しか見られないし、最東に位置する権現田もドーム形を呈するので、グループ内でも同様な傾向が読み取れるわけである。

一方、平面形態ではやはり天井形態を反映するように、逆台形Ⅰが圧倒的多数を占める。

また、逆台形Ⅱよりも三角Fが多く存在する点も一つの特徴かも知れない。

両形態の組み合わせは、判別可能な103基を対象に行った結果、半数以上が逆台形Ⅰ＋アーチ形とⅤグループと同様な様相を呈することが判明した。ドーム形天井を有する場合の平面形態は、通常は矩形の場合が多いが、ここでは逆台形Ⅱや丸底Fの方が数値的には上回る結果となった。そして、アーチ形天井の場合、本来は逆台形Ⅰに集中するが、ここ

では逆台形2や三角Fの数値も高く、分散する傾向が読み取れる。また、矩形の中でも整然とした矩形1ないし2は全く見られず、コーナーが丸みを帯びたり、あるいはやや形の変形した矩形3がほとんどである。

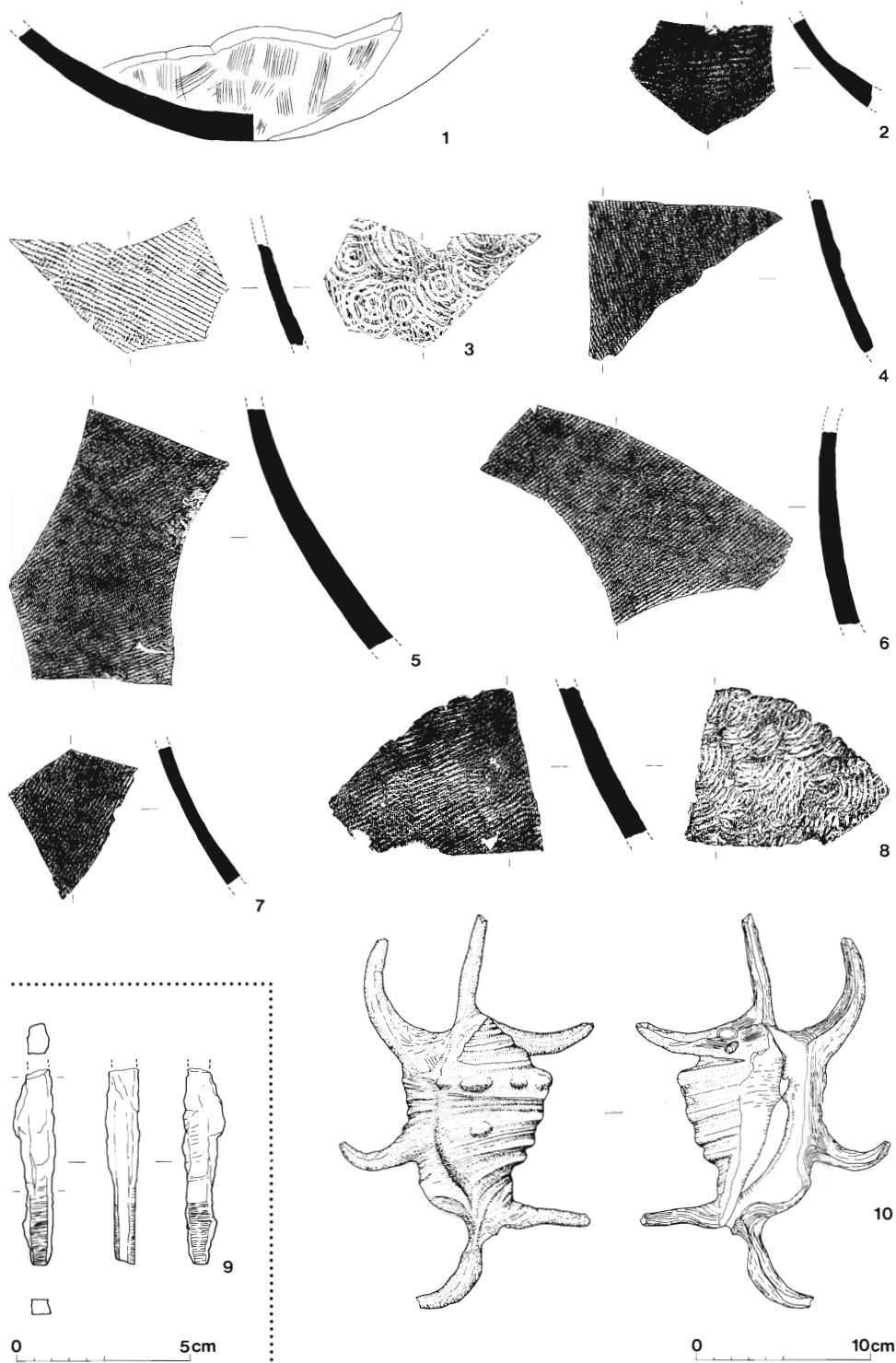
内部施設の特徴としては、棺座や石棺の付設割合が非常に少ないことである。特に石棺は皆無であるし、棺座にしても東奥沢で2基存在するだけであり、総基数を考慮すれば客体的な在り方を示しているものと理解される。その一方で、漆喰（白色顔料）は13基に施されており、全体の7割以上がここに集中しているわけである。中でも東側では、4群63基中約15%にあたる10基に見られ、しかも1群中4基にも及ぶ（たれこ谷戸西）ものも存在する。

また、線刻は4基で、数値的には全体の1/3に及ぶものである。なお、たれこ谷戸西では、奥壁に浅い龕に如来像が浮き彫りされているが、これは線刻欄には加えていない。

ところで、壁面装飾では何と言っても天井部を肋骨状に仕上げる技法の多さが群を抜いている。本グループのほとんどの横穴墓群（1横穴墓群で1～4基）で見られ、その数は25基にも達するが、この数字は、全体の8割以上に及ぶもので、如何に集中的に存在しているかを如実に物語るものである。



第8図 VIグループ全体図



第9図 採集遺物拓影・実測図

採集遺物

横穴墓の詳細分布調査においては横穴墓群の現況を把握することを本旨としたため、表面採集によってのみ遺物を採集した。遺物は7横穴墓群から採集されている。

第4表 採集遺物

No.	横穴墓群名	採集位置	種 類 及 び 点 数	図中番号
12	楊谷寺谷戸	——	須恵器甕 3	第9図1, 2
19	坂田山付	第2号墓	須恵器甕 15, 須恵器蓋 1, 土師器甕 2	第9図3～7
41	本郷山	——	須恵器甕 1	第9図8
46	辻端東	第4号墓	鉄製品 1	第9図9
47	辻端	第10号墓	瓦器 5	——
56	権現入田	第6号墓	人骨	——
69	たれこ谷戸東	第1号墓	スイジガイ 1 <i>Lambis (Harpago) chiragra</i> (LINNE)	第9図10

小 結

詳細分布調査により判明した事実については、前章で詳しく述べたとおりであるが、その結果は、決して大磯町の横穴墓群の全容を表しているものでない。確かに分布や遺存状態はある程度正確に把握できたと考えられるが、重ねて述べるまでもなく、全体の約1/3は形態が不明であり、略測できた横穴墓についても流入土を除去して計測したものではない。したがって、あくまでも詳細分布調査の一つの結果にはかならないのである。

しかし、種々の制約があるにしても、そこから得られた情報を現在の横穴墓研究の現状の中で、試行錯誤しながら最大限活かしてみることにもまた必要ではないかと考えるに至ったのである。横穴墓に関する課題は多く、すべてにわたって論ずることは、紙数の関係や焦点が惚ける可能性もあり、形態面と壁面装飾についてのみ述べ、これをもってまとめたい。

まず、形態面について述べることにする。大磯町は面積約17km²と決して広くないが、そこに造営された横穴墓には、天井・平面形態は勿論、内部構造に至るまで非常にバラエティーに富むものが多く、任意に想定したグループによっても、近似あるいは相違する点が多々みられたわけである。すなわち、前者は天井・平面両形態において、いずれも圧倒的に逆台形1＋アーチ形が多いと言う事実、後者は類型のバラツキと内部施設の割合、壁面装飾等の多少があげられよう（第5表参照）。

ところで、大磯町の横穴墓群については、既に1964年、赤星直忠氏により下田横穴墓群をはじめとする7横穴墓群の調査概要並びに分布、形態と時間的変化など詳細な報告がある（赤星1964）。その中で、大磯町内において最も数が多いタイプは、「断面アーチ形の膨

第5表 グループ別類型基数

グループ区分	I	II	III	IV	V	VI	合 計
群 構 成	2群13基	25群141基	9群35基	6群19基	12群131基	23群138基	77群477基
対象群・基数	1群6基	13群77基	4群19基	3群6基	10群87基	17群103基	48群298基
矩 形+ドーム		18	1		8	4	31
矩 形+アーチ		4			5	1	10
矩 形+家 形		7	2				9
逆台形1+ドーム		1	3		5	4	13
逆台形1+アーチ	4	26	8	2	47	56	143
逆台形2+ドーム					3	6	9
逆台形2+アーチ		4	1	4	7	8	24
三 角 F+ドーム						1	1
三 角 F+アーチ		2	2		6	14	24
丸 底 F+ドーム	2	5			4	6	17
丸 底 F+アーチ		2			1	2	5
羽 子 板+ドーム		2	1				3
羽 子 板+アーチ		6	1		1	1	9
合 計	6	77	19	6	87	103	298

張筒形のもの」で、「幅も高さも奥が最大で、羨門部が最小」のものであるとされている。これは、今回類型化した所謂、逆台形1+アーチ形に該当するものであり、赤星氏の見解を再度証明したものと言えよう。

また、杉山博久氏は、神奈川の横穴墓群を素描されているが(杉山1980)、形態について「アーチ形天井の系統に属する横穴墓の検出例は極めて高く……ほぼ71%という高い比率を占めている」と具体的な数値をもって述べられている。今回の調査では、約74%がアーチ形天井であり、県内における数値よりやや上回る結果となっている。

手元にある相模川以西の主要な横穴墓群を類型化してみると(第6表)、二宮町諏訪脇横穴墓群(三上1972・赤星1973)は別にして、逆台形1+アーチ形の横穴墓が如何に多く検出されているかが容易に理解される。このタイプの横穴墓がどの程度まで空間的に分布しているか、詳細に調査する必要があるが、これほど集中して存在する点を考慮して、これを大磯型と呼称したい。ただ、課題とすべき点が若干ある。それは、横穴墓の全長である。同形態の横穴墓でも、全長が3m以下のもの、例えば平塚市高根8号墓(杉山1976・1977)、同宮ノ入4号墓(杉山1987)、大磯町北中尾10号墓(鈴木1992)、二宮町大日ヶ窪8号墓(杉山1988)等と、逆に4mを越すもの、例えば平塚市万田八重窪18号墓(杉山1987)、北中尾4号墓、大日ヶ窪6号墓等がある。これらを同一に扱うべきかどうかと言う点と、大局的には、直線的な逆台形1と曲線的な逆台形2の取り扱いをどうするかと言う点が課題として残る。

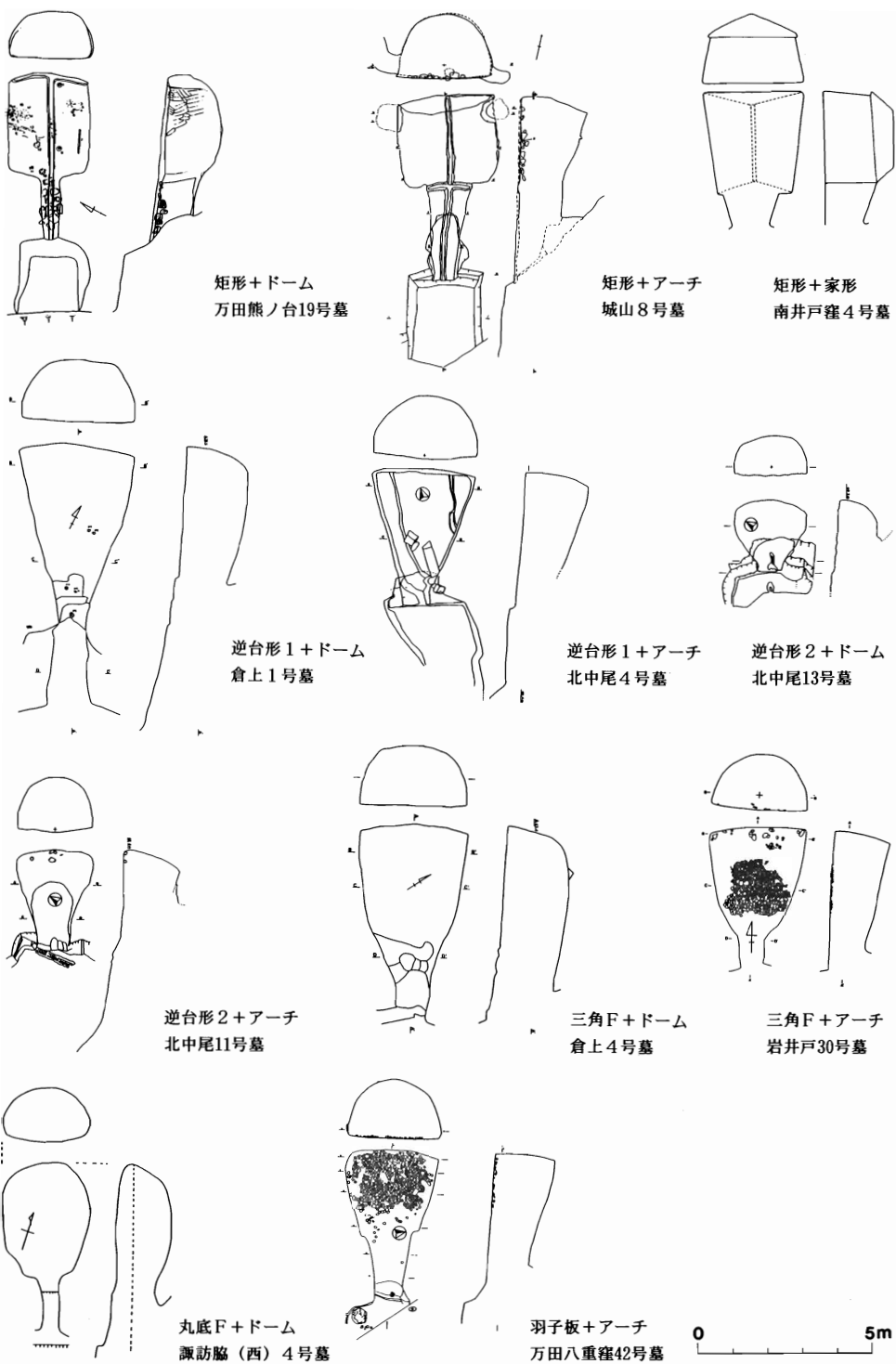
第10図に今回類型化した各タイプに該当する横穴墓を当て嵌めてみた。こうした、形態を中心とした編年は既に赤星直忠氏が1964年に作成しており（赤星1964）、その発生を竪穴住居に求めているため、初現形態が矩形+家形になっている。一方、明石 新氏は、最近隣接する平塚市域について、遺物を交えながら4段階の変遷を提唱している（明石1990）。初現形態は、矩形+ドーム形であり、時期的には6世紀後半としている。個人的には、地域により異なる場合も想定されるし、両者がさほど時間差なく構築されたとも考えているが、今回の調査で得られた成果では、時期決定の最大要素である遺物が欠落しているため、そうした先学諸氏の業績を操作することはできない。しかし、初現形態としての横穴墓がどのグループにみられるのか、換言すればいち早く造営された所はどこなのかを考えてみたい。

まず、矩形+家形の横穴墓は、Ⅱ及びⅢグループに存在する。具体的には、南井戸窪（4基）と石切場（1基）、楊谷寺谷戸（2基）、清水北（2基）の4横穴墓群9基で、前三者（7基）は既に池上 悟氏により詳細な検討がなされている（池上1995）。すなわち、楊谷寺谷戸の1例が切妻妻入り型式の他は、すべて寄棟妻入り型式で、なおかつ、玄室平面の矩形の台形化による相対的変遷から石切場例をもって家形横穴墓の最古となし、その時期は6世紀後半代を想定している。清水北例は、共に切妻妻入り型式で、平面形は確かに整正な矩形を呈するが、報告者である赤星氏も「その一つ以前の祖形が妻入切妻造りであった」と述べているとおり（赤星1964）、天井形態はかなり簡便化されたものであり、明らかに前記したものより後出である。

一方、当地域周辺での初現形態である矩形+ドーム形は、第10図に示した平塚市万田熊ノ台19号墓（明石1985）を最古とするが、平面形は類型化した矩形1がこれに該当する。大磯町で、矩形1に該当する平面形を有する横穴墓は、単純には先の家形例の幾つかがこれに該当するだけであり、大半は台形化の進んだ矩形2と隅丸方形の矩形3である。これらにドーム形天井が伴う横穴墓が果たして、いつ頃構築されたのか、基数の割りに調査例の少ない当地域では確かなことは言えないのが現状である。かつて、赤星氏は比較的古い形態と考えられる横穴墓を調査して、遺物からそれを証明しようと試みた。結果的に目的

第6表 周辺地域の横穴墓群

No.	名 称	基数	開口方向	天 井 形 態				平 面 形 態										内 部 施 設				壁面装飾			
				ドーム	アーチ	家形	不明	矩形1	矩形2	矩形3	逆台形1	逆台形2	三角F	丸底F	羽子板	不整形	不明	排水溝	棺座	石棺	礎石	竈	漆喰	線刻	肋骨仕上
1	岩 井 戸	12	南～南西		12					7		2		1	1	1	2	3	1	5					
2	諏 訪 脇 東	17	東～南西	12	5			4	2	7	3						9	1	4	9			1		
3	諏 訪 脇 西	16	東～南東	12	4					7	2	2	1	3	1		2	3	4	1			1		
4	根 板 間 B	7	南東～南	2	4		1				3	1				2	1	2	4						
5	八 重 窪	18	南東～南		16		2				12		3		1	2		5	1	5	8				
6	宮 ノ 入	11	南東～南		11						11							3	4	2	3			4 1	
7	大 日 ヶ 窪	33	東～南西	4	26		3				27	2				2	2	7	3	3	12			2	
8	倉 上	18	南東～南西	3	12		1				12	1	2	1		1	1					1			



第10図 類型別横穴墓

を達せなかったが、既にそれから30年以上経過した現在でも状況はさほど変わっていない。最近、平塚市城山横穴墓群（明石1995）では図示したように矩形1＋アーチ形の横穴墓が検出され、7世紀前葉の須恵器が出土している。根拠は弱い⁽⁵⁾が、当地の矩形2及び3＋ドーム形の横穴墓も7世紀前半代の所産ではないかと想定される。

もし、仮にこの推論が正しければ、矩形＋ドーム形で6世紀後半にまで溯る横穴墓は、現在までのところ、大磯町内では知られていないことになり、6世紀後半と推定される石切場例（Ⅱグループ）の家形横穴墓が当地域で最古の形態と言うことになる。この点は今後の調査の進展により具体的に明らかにされていくものと考えている。

いずれにしても、先の類型にドーム形の天井部を有する横穴墓は、Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ・Ⅵグループに存在し、基数の相違こそあれ、時間差なく造営されたと考えられ、これを契機に以後大磯型が盛行するまで、脈々と続いたものと理解される。そして、中でもⅡグループが大磯町において先駆的な役目を果たしていた、換言すれば最も早く横穴墓が造営された地域であったと考えられる。

次に壁面装飾について、若干述べることにする。この項目には、漆喰・線刻・肋骨仕上げの3項目を設定したが、ここでは肋骨仕上げについて考えてみたい。確認された477基の横穴墓の内、天井形態が判明した343基の中で、この技法が見られた横穴墓は31基であり、数値的には約9%と非常に低い。しかし、グループ別にみると、東寄りのⅠ・Ⅱグループには全く認められず、Ⅲグループでも1基、Ⅳグループは無し、Ⅴグループで5基と西に向かうに従い数を増し、Ⅵグループでは全体の8割に及ぶ25基と、集中して存在する傾向を示しているのである。Ⅵグループは23群138基で構成されているから、2割近い横穴墓にこの技法がみられるわけである。また、1群に固まって存在するのではなく、多いもので1群4基、大抵は1群1～2基みられ、同グループ全体では6割近い14群にわたって確認されたものである。したがって、この技法は大磯町の西部地区に顕著に認められるものであり、かつて、この地が余綾郡余綾郷に属していたことを考慮し、余綾技法と命名したい。

この技法がみられる横穴墓は、逆台形1＋アーチ形の所謂大磯型としたものに多くみられる。すなわち、31基中19基と6割以上の数値を示す。そして、玄室と羨道がくびれることでそれが区別される三角F＋アーチ形にもある程度散見できるので、平面形態の変遷のみ考えれば、ある程度の時間差が指摘される。また、肋骨状の仕上幅であるが、太いもので14～16cm、細いもので4～5cmで、多くの例は6～8cmである。

近隣ではⅣグループ北方に位置する平塚市万田宮ノ入横穴墓群で1基（7号墓）検出されているが、逆台形1＋アーチ形であり、幅は8cmである。同位置関係にある万田八重窪や根坂間では全くみられず、Ⅵグループ西側に位置する二宮町大日ヶ窪や倉上でも皆無である。

このように、今のところ特定地域に集中し、その周囲に若干類例がみられると言った状況であり、なおかつ平面及び天井形態から比較的后出の横穴墓に多くみられるもので、特殊な技術を有する工人集団の存在と同時に新しい掘削技術の導入背景等残された課題は非常に多いが、今後類例の追求に努め、僅かずつでも真相に迫りたいと考えている。

おわりに

前半は、詳細分布調査の成果について調査事実を、後半はそれに基づく私見を述べた。結果的には、課題を残す形となったが、足場作りだけではできたのではないと思う。特にグループ分けについては、水系や尾根あるいは横穴墓群の位置により机上で行ったものであるが、個々の横穴墓群のデーター等から逆算してグループを設定することも可能であるし、そこから様々な要素を抽出して、更に小さなグループ（集団）に分けることにより、一つの支谷に造営された幾つかの横穴墓群の在り方を解明していく手立ての一つとしても利用できそうである。ただし、その前提として、必要十分な条件が揃っていないことだけは確かであろう。そうした意味で今回の調査は、言わば条件整備の第1段階とも言えるのではないだろうか。

当面の課題として、横穴墓群造営の最も早かったと考えられる地域、その要因はなんであったのだろうか、社会的背景が気になるところであるし、また、各形態の変遷に遺物を交えた段階設定の見直しも必要であろう。ただ、横穴墓の性格上、造営当初の遺物の発見は中々難しく、多くは落盤により発見されるものと考えられるが、その場合は天井形態が把握できず、痛し痒しと言ったところである。

また、最も懸念しているのが、勝手に命名させてもらった大磯型や余綾技法が果たして成立するのかどうかと言うことである。時間的余裕もなく、県内をすべて網羅したわけではないので、今後類例等を追求し、今回触れることのできなかった部分、例えば内部施設や壁面装飾（漆喰や線刻）と併せて、再度発表したいと思う。

なお、詳細分布調査及び成果の公表については、立正大学池上 悟氏にお世話になると共にご快諾をいただいた。また、日頃横穴墓研究に精進されている平塚市博物館明石 新氏には、文献はじめ貴重なご教示を賜った。末筆ながら、記して感謝申し上げます。

註

- (1) 近く刊行予定の大磯町史研究第4号に、「大磯町における遺跡調査の記録～先人達の偉業を振り返る～」と題する小論の中で、石野時代・赤星時代と呼称し、詳しく述べておいた。
- (2) 池上 悟 1995 「南関東における家形横穴墓」の中では77群477基となっている。77群は遺跡台帳の群数である。
- (3) 池田彦三郎・鈴木 昇 1964 『大磯町横穴墓および古墳地名表』による数値である。

- (4) 『新編相模國風土記稿』の淘綾郡大磯宿の項に「岩窟 本堂の北にあり……」との記載がある。
- (5) 平塚市城山横穴墓群第7号墓は(明石1994)、矩形平面で天井部が切妻妻入り型式をとる。明石氏は、万田熊ノ台19号墓と同時期もしくはそれを溯る可能性を指摘されている。大磯町で想定されている6世紀後半の家形横穴墓は、寄棟妻入り型式で、明らかに天井形態が異なる。工人集団の相違や地域差も指摘されるし、こうした新たな掘削技術の導入がどのような社会的背景のもとになされたのか非常に気にかかるところである。

参考文献

- 細木松之助 1886 「東海地方ニテ人類学ニ関スル略報」『東京人類学会雑誌』第6号
- 山崎直方 1887 「大磯駅近傍にある横穴塚穴の話」『東京人類学会雑誌』第20号
- 若林邦勝 1887 「相模國淘綾郡大磯及び山西村横穴実見記」『東京人類学会誌』第22号
- 中川成夫 1955 「相模愛宕山横穴調査報告」『史苑』第16巻第1号
- 赤星直忠 1964 「神奈川県大磯町の横穴」『大磯町文化財調査報告』第1冊
- 三上次男 1972 「諏訪脇横穴群(東部分)」『神奈川県埋蔵文化財調査報告書』3 神奈川県教育委員会
- 赤星直忠 1973 「諏訪脇横穴群(西部分)」『神奈川県埋蔵文化財調査報告書』4 神奈川県教育委員会
- 杉山博久 1975 『岩井戸横穴墓群の調査概報』
- 杉山博久 1976 「平塚市内の横穴墓群Ⅰ」『平塚市文化財調査報告書』第12集 平塚市教育委員会
- 杉山博久 1978 「平塚市内の横穴墓群Ⅰ」『平塚市文化財調査報告書』第13集 平塚市教育委員会
- 杉山博久 1978 『岩井戸横穴墓群の調査記録』
- 杉山博久 1980 「神奈川県の横穴墓群—その素描—」『古代探叢—滝口宏先生古稀記念考古学論集—』早稲田大学出版
- 明石 新 1985 『相模川流域の横穴墓』平塚市博物館夏期特別展図録
- 杉山博久 1987 『万田八重窪・宮ノ入横穴墓群』
- 鈴木一男他 1987 「愛宕山下横穴墓群」『大磯町文化財調査報告書』第28集 大磯町教育委員会
- 杉山博久 1988 『大日ヶ窪横穴墓群』
- 杉山博久 1990 『二宮倉上横穴墓群』
- 明石 新 1990 「根坂間横穴墓群B支群」『平塚市埋蔵文化財シリーズ』14 平塚市教育委員会
- 鈴木一男 1992 「北中尾横穴墓群」『大磯町文化財調査報告書』第39集 大磯町教育委員会
- 國見 徹 1994 「金久保北横穴墓群」『大磯町文化財調査報告書』第41集 大磯町教育委員会
- 明石 新 1994 「岡崎城A・城山横穴群」『平塚市埋蔵文化財緊急調査報告書』7 平塚市教育委員会
- 明石 新 1995 「岡崎城A・城山横穴群」『平塚市埋蔵文化財緊急調査報告書』8 平塚市教育委員会
- 池上 悟 1995 「南関東における家形横穴墓」『王朝の考古学—大川清博士古稀記念論文集—』雄山閣